

①見守り対象となる高齢者

テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 2-1 に示す。「一人暮らしの高齢者が中心」「民生委員の訪問を楽しみにする高齢者」「人付き合いを嫌う高齢者」「地域・隣近所の付き合いは密接」であった。

表 2-1 テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
見守り対象となる 高齢者	一人暮らしの高齢者が中心
	ある地区では 80 人前後の独居高齢者が暮らす
	訪ねて来るのはサルやイノシシだけというほど、山奥に暮らす人も
	民生委員の訪問を楽しみにする高齢者
	来てくれ、と電話してきたり、訪問すると長話をしてなかなか離してくれない人も
	人付き合いを嫌う高齢者
	民生委員と話くらいはするが打ち解けることなく、隣近所としか付き合わない人も本当に少ないがいます。
	区長が直接出かけていってもぜんぜん取り合わない
地域・隣近所の付き合いは密接	

②地域の力と見守り

テーマ「地域の力と見守り」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 2-2 に示すとおりである。「土地の密着度の高さ」「地域の集まりのよさ」「地域の住民同士の連携・相互扶助」「隣近所の情報」であった。

表 2-2 テーマ「地域の力と見守り」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
地域の力と見守り	土地の密着度の高さ
	山の奥に行くほど何代にもわたって住んでおり、代々の地域の絆、結びつきが強い
	地域の住民のほとんどが顔見知り
	地域の集まりのよさ
	老人会などの活動は活発
	近年ではお神楽をよぶなど、地域で娯楽を共有する集まりも積極的に企画
	地域の住民同士の連携・相互扶助
	毎日の生活の中で、自然にお互い支えあい気遣いあっている
	姿が見えないときは隣近所や近くの親戚が見に行く、電話で連絡を取るなどする場合が多い
	谷を隔てた向こうの一人暮らしの家の明かりがつかると今日も元気だと安心し、自分も頑張ろうと励まされる
	近所の者の体調や病状などを普段から気にかける
	留守のときは隣近所に声をかけて出る
	隣近所の情報網
体調不良などは事前にみんなが知っている	
通院日や買い物に行く日などは隣近所は大体把握している	

③見守りの方法

テーマ「見守りの方法」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 2-2 に示すとおりである。「民生委員による見守り」「民生委員と他のものとの連携」「他の機関による見回り」「地域での見守り」であった。

表 2-3 テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
見守りの方法	民生委員による見守り
	独居高齢者、体の弱い方を中心に安否確認のための祝い訪問を週一回程度行う
	民生委員として特別に見守っているというあまり意識はなく、友達、仲のいい近所・集落仲間として、日ごろの生活の中で気になってふらりと立ち寄る感覚
	70 歳以上の人の生年月日を把握して誕生日にハガキを出したり、近くの人にはお赤飯を炊いたりして喜んでもらえるように心がける
	民生委員と他のものとの連携
	見回ってみて体調などが特に気になる人については保健師さんらに連絡する
	隣近所、もしくは遠方の子供さんらに連絡して定期的な安否確認、必要であれば緊急通報装置の設置を頼む
	行政、地域包括、かかりつけ医など問題によって、どこに言えば解決されるかを民生委員は把握しておくようにしている
	保健婦、社協、行政の地域担当などいろんな人が支えに
	通院日や体調など、隣近所の人が把握している情報が民生委員の仕事の大きな助けになっている
	他の機関による見回り
	主に病気の方を対象にした保健婦さんの家庭訪問はよく活動されている
	行政は住民をよく把握している
	地域包括は成立して 2 年ほどだが、今のところ機能している
地域での見守り	
地域自体がまるで家族のようにお互いを見守りあっている	
子どもたちに対しては礼儀礼節を教えることを大切にする一方で、あいさつ・声かけが自発的にできるように、このことは地域のつながりを生む第一歩となっている	

④見守り活動を実施していく上での困難

テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 2-3 に示すとおりである。「急激な高齢化・人口減」「交通の便の悪さ」「緊急時の交通手段やマンパワーの不足」があった。

表 2-4 テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
見守り困難な点	急激な高齢化・人口減
	見守る側、見守られる側がともに減少していく
	地区によれば 10 年で人口が半減するなど、集落自体が消滅するおそれ
	子どもの数も減少しているため、学校の統廃合が進み、通学がかなり遠方になるなど子育てが困難な状況で、若い人、子育て世代を呼び込めない
	交通の便の悪さ
	道路が整備不足で車の運転がスムーズに行かない、特に冬場に雪が降ったときは困難
	役所に何度も陳述には行くものの、「経済効果がない」とかで受け入れられない
	緊急時の交通手段やマンパワーの不足
	道路の未整備のために救急車が出動できない地区もある
	県下に医療救急ヘリがない
緊急時に対応できる機関、人手が絶対的に不足している	

⑤見守り活動の方向性

テーマ「見守り活動の方向性」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 2-4 に示すとおりである。カテゴリは、「現状維持」「民生委員が情報を共有する」「現在の『地域での見守り』のシステム化」「人口の維持、発展守秘義務」「地域の結びつきをさらに強化し、よりよい地域づくりを」「行政との協力」があった。

表 2-5 テーマ「見守り活動の方向性」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
見守り活動の方向性	現状維持
	今の感じの延長、しばらくはこのままの状態にいけそう
	昔からの地域の絆を引き継ぐ
	民生委員が情報を共有する
	民生委員が。各家庭での高齢者や病人が寝ている場所を調査し把握しておく、緊急時や災害時に役立つのでは(ただしプライバシーに留意が必要)
	現在の「地域での見守り」のシステム化
	地域の住民が互いに定期的に安否確認をするなどシステム化ができないか(どこの島は向かいの島と朝旗で合図するようなのでそれと類似のことができるのでは)
	人口の維持、発展
	消滅集落させないために、人口を減少させない、さらには増やす方法を考える
	1ターン・Uターンを呼び込み、その受け入れ態勢を整える
	若年世代に定住してもらい、若い力を入れていく
	地域の結びつきをさらに強化し、よりよい地域づくりを
	地域が一体となって互いに気遣えるように、一体感、意識を高める
	老人会などの組合員・非組合員の垣根を越えて、地区で一緒に娯楽を共有することなどによって、一体化を図りたい
	高齢者だけでなく子育てなども含め生まれてから死ぬまで地域みんなで見守るように
	行政との協力
	行政の力をかりて、高齢化の進む限界集落でうまくやっていくモデルとなる 公民館の建設や道路の整備などのハード面に加えて、行政自身の住民への見守りや健康管理などソフト面でも協力を仰ぐ(厚生省や国交省を対象に) 地域活動への協力、バックアップを求める

(2) 見守りが必要な高齢者を支援している専門職へのインタビューの質的分析結果

専門職へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表 3 に示す。

表 3 専門職に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ
見守りの現状	孤独死はない
	死が自然にある
	見守り活動
	共に生きる
現在の見守りの方法	地域での見守り
	専門職による見守り
	地域担当職員の役割
これからの見守りの方法	見守りの体制
見守り支援と課題	ネットワークの継続
	地域の力
	人材養成

①見守りの現状について

テーマ「見守りの現状について」に関するカテゴリとコードの一覧については、表3-1に示すとおりである。カテゴリとしては「孤独死はない」「大豊は死が自然にある」「見守り活動」というカテゴリがみられた。

表3-1 テーマ「見守りと現状」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
見守りと現状	孤独死はない 一人で亡くなる人はゼロではない。畑にちょっと行って畑で倒れていたとか。しかし、本当に集落の中で孤立しきったという人は、非常に少ない。 日常生活の中で、突然死が襲ってくるということもある。また、精神疾患とか、人との交渉が物凄く苦手で、閉じこもっている人もいる。ただ周囲の人は、その人がそういう状態になっているということを知っている。
	死が自然にある 5年とか10年の単位で一人二人は、死後一、二週間経って発見される方に出会うことがある。高齢者でも障害者でもないことが多い。普通に、活動的な50歳代後半とか、たまたま発病して、「まさかあの人か」というような
	見守り活動 特別に見守り組織を立ち上げなくても、何とかやっている
	見守りについては、地域包括支援センターよりも地域担当、地域担当よりもさらに民生委員や区長、ボランティアや住民で、地域で暮らしている人の間でお互いがお互いを見守っている。
	人も見守り、地域ごとに見守っている
	共に生きる 10年くらい前までは民生委員が相談を持ちかけるときは、「その住民をどこかに移してくれ、なんとかしてくれ、施設に入れてくれ」みたいな相談が多かったが、今は「いっしょにここで生きていこうよ」みたいに接する民生委員が非常に多い。

②現在の見守りの方法

テーマ「現在の見守りの方法」に関するカテゴリとコードの一覧については、表3-2に示すとおりである。「地域での見守り」「専門職による見守り」「地域担当職員の役割」のカテゴリがみられた。

表3-2 テーマ「現在の見守りの方法」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
現在の 見守りの方法	地域での見守り ネットワークを広く、民生委員を中心に地域で
	専門職による見守り 気にかかる人を対象に訪問活動 民の力と社会福祉協議会などいろいろなところと連携を取っている
	どんな相談もどこに持ち込まれた相談も連携を取りながらワンストップサービスで体応している
	地域担当職員の役割 介護予防とか介護支援のケアプランをうけるようになって地域の何歳以上を全戸訪問ができなくなってきた。その活動を地域担当職員が担っている
	今日も地域担当が気になる人を見つけ「どこそこの誰々さん、足が痛い、何とかしてくれ」と張り紙(伝言メモ)をしてあった。すぐ(保健師)が対応する

③これからの見守りの方法

テーマ「これからの見守りの方法」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 4-4 に示すとおりである。「見守りの体制」「見守り対象者の把握方法」のカテゴリがみられた。

表 3-3 テーマ「これからの見守り方法」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
これからの見守り方法	見守りの体制
	人口減少など地域の変化にそった状態合わせて形で
	山間部の孤立地域へ行くと大変喜んでくれる 楽しみながらまた訪問する。そんな日々の継続
	介護予防と合わせながら

④これからの見守り支援

テーマ「これからの見守り課題」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 4-5 に示すとおりである。「ネットワークの継続」「地域の力を引き出す」「人材養成」のカテゴリがみられた。

表 3-4 テーマ「見守り支援と課題」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ
見守り支援と課題	ネットワークの継続
	ここへ相談に来たらなんとかなるという現在のサービスの継続
	地域にある住民同士のネットワークの手伝いをしていくことが大切である。
	地域包括支援センター、地域担当職員、社会福祉協議会の職員が一体となって問題を解決しているワンストップサービスの継続
	地域の力
	本来地域が持っている力を引き出していくことが大切
	地域包括支援センターの役割は、見守りをしてくださる民の力があつたら、その人たちを支えることが一番
	住民はエンパワメントする力がある
	これまで行政が「何とかしないとイケない」と考えてきたが本当に欲しいサービスは住民が作り出していく時代になってきた
	人材養成
	民生委員、区長の引き受け手がない 高齢化、人口減少の厳しい現状で次の見守り世代の養成が課題である

第4章 まとめ

大豊町における「高齢者の見守り」について、アンケート調査ならびに民生委員および地域包括支援センター専門職へのインタビュー調査結果から、見守りの現状や地域の課題などについてまとめた。

1. 地域の特性と活動の特徴

農山村地域における人口の過疎化・高齢化の進行は、地域における集落機能や社会活動の低下をまねいている。大豊町は昭和45年(1970年)に12,440人であった人口が現在約43%まで減少している。また、隆起した峻嶺に囲まれた複雑な山岳地帯であり、平坦地はほとんどなく、集落は、標高200メートルから700メートルという急傾斜地に散在し、特に高齢者の生活を困難にしている。

こうした状況の中で、高齢者が高齢者を支える現状がある。大豊町には特別な見守りのための組織はない。地域の見守りの中心的な役割を民生委員が担っている。アンケート調査結果、一人の民生委員が2つ以上の地域の役職を持っており、15%が区長、児童委員、婦人部会など5つ以上の役職を持っていた。具体的な活動内容としては、「見守り」や「相談活動」「地域の高齢者の実態把握」「行政機関や関係機関との連携」「地域の連携・協体制づくり」などの活動を行っていた。

ほとんどの人が地域への愛着を持ち、地域の人との信頼関係が築きやすいと感じていた。厳しい生活環境の中で人々は生活面で協力しながら暮らしてきた生活の歴史は、相互扶助の文化を育んできた。近隣の人々が協力しながら暮らしている。こうした「地域の力」が見守り活動にも生かされていると考えられる。「谷を隔てた向こうの一人住まいの高齢者の家の明かりがつかると今日も元気だと安心し、自分も頑張ろうと励まされる」というような、家の明かりが安否確認の方法となっていた。

多くの民生委員は一人暮らしや、高齢者のみの世帯を訪問し、健康状態を中心に、病院のかかり具合や食事の管理、火の始末、外出の機会など、多岐にわたり見守り活動を実施していた。内容が多岐にわたるため、一人では対応が困難になっておりまた、民生委員の仕事かどうかは迷いながらも、病院への送迎なども行っていた。

2. 見守り活動の状況と課題

孤独死の危険性はないと72%が回答したが、15%が孤独死の危険性を危惧している。理由としては近隣との関係が希薄であることがあげられ、これまでの培われてきた「地域の力」が弱体化している可能性が考えられる。

見守り対象者は、世帯でみると一人暮らしが最も多く、次いで高齢者のみの世帯で、対象者の状態では、健康状態のよくない者が最も多く、次いで認知症のある高齢者と寝たきり高齢者であった。直接訪問したり電話をかけたしなが、近隣と協働で、日常生活の中で見守りが行われている事がわかる。見守りのいきさつは高齢者世帯の実態把握からがほとんどであった。

民生委員は多忙で、役割の多様化と責任の重大さを感じて困惑している様子がうかがえる。民生委員が行政の肩代わりをしているのではないかとの意見もあった。民生委員をはじめ地域の多くの役割を担う人がいなくなっている。急速な高齢化は見守り側にも次の人材養成という課題を

内在している。

3. 専門職の見守り支援の状況と課題

特別に見守り組織を立ち上げなくても、何とかやっている。地域で暮らしている人のお互いがお互いを見守っている、と地域の専門職は考えていた。

85%の民生委員が地域包括支援センターに相談した経験があった。また、地域の各組織の専門職は、どんな相談やどこに持ち込まれた相談も連携を取りながらワンストップサービスで体応していた。アンケート調査やインタビュー調査から、民生委員をはじめ地域住民に信頼されている様子がうかがえた。地域包括支援センターや社会福祉協議会、地域担当職員（行政）は援助組織として理解されているが、更なる連携のもと、地域の見回りなど、きめの細かい日々の援助が求められている。

4. 本年度のまとめ

アンケート調査、インタビュー調査を実施した結果、これまで培ってきた「お互いを気遣う」という、相互扶助による「地域の力」に支えられた高齢者の生活が明らかになった。高齢者見守りのための組織体制としては存在しないが、機関の専門職や職員が地域住民と顔なじみで、各機関が連携をとりながら必要時は敏速に対応していた。

住民、各機関専門職は、これまで地域が培ってきた文化は日本が失った習慣や伝統であることを深く認識し、誇りを持って暮らしている。孤独死を出さないために、出来ることを何でもやると考え行動する姿勢で、地域担当職員の配置などこれまでなかったサービスを生み出す力が地域にある。

全人口が減少し、高齢化率が50%を超え、ひとり暮らしの高齢者がこれから急増する現状で、今後高齢者や独居者支援している地域の機能の低下が危惧される。安否確認や日常生活の手助けは、地域のつながりの強さに左右されている。山間部である生活条件を考慮したとき、介護保険や医療保険ではカバーしきれない安否確認などの見守り活動は、買い物や配達など高齢、独居、孤立への生活支援と合わせた見守り体制が課題となると考える。

大豊町は経験豊かな保健師がほとんどの世帯の住民生活を把握している。これに加えて地域担当職員が住民相談を直接的に行っている。その為、よろず相談役として随時、訪問をおこなっていることから地域住民の見守りの役割も果たしていたことが明らかになった。